



TITLE:

濱田耕作先生の訃 附著作目録

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 濱田耕作先生の訃 附著作目録. 東洋史研究 1938, 3(6): 542-549

ISSUE DATE:

1938-09-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/147087>

RIGHT:

濱田耕作先生の訃

附 著 作 目 録

文學博士濱田耕作先生はかねて病氣靜養中のところ病あらたまり、七月二十五日朝逝去された。思慕哀惜の情は學界にみなぎる。先生の學界における樞要な位置についてはわたくしどものいふを要しないところであらう。たゞこれも先生學徳のいたすところとしてひたすら敬慕するばかりである。専門の考古學においても先生の學識はひろくあらゆる考古學の分野にわたつてゐる。今日では考古學も分化し、もうこれだけひろい學者は當分出ないであらうと思ふ。もつとも考古學創業の時代が先生にひろい學識を要求したともいへやうが、それにしても行くとして可ならざるなき先生の天分がなかつたならば、決してかくのごとくはならなかつたであらう。

大學の講義も日本考古學から東洋美術、さてはギリシヤ、ロオマの考古學にわたつてをり、そのエッセンスが通論考古學になつてゐる。考古學教室の報告書も

石器時代からバテレンの墓石、屏風にまで及んでゐる。あまねく求めてかたよらぬやうにとは自らも努めてゐられたとともに、またわたくしどもにもたびたび申しわたされた。學界はこの不黨不偏の指導者をえて正常な成育をとげたのである。先生は常に教室にあつて仕事をされた、衆力を合して物事を遂行された、それは公もなく、私もなく境地であつたと思ふ。仕事は常に教室中心であつたけれども、同時にそれが日本學界の仕事であるとの自覺はあつたと思ふ。日本における唯一のさうして最初の考古學講座を擔當した教授としてそれだけの矜持は當然であり、またそれにふさしい業績をも示された。先生が衆を卒ゐて教室の報告書をつくられた、そしてその書によつて天下の衆を導かうとされたことを知つてゐるものには教室の四六倍版の報告書にこの上もない懷しさと、そして榮光とを感ずるのである。

こゝには日本のものを除いて、ひろく東亞に關する著作目録をつくつたが、その最初に來るものが「支那の古銅器に就いて」^{國華一六三}なる論文である。明治三十六年といへば確かに東大文科在學中である。「自分は支那のことは嫌ひであつた、併しこれをだんだん研究するやうになつたのは内藤先生や小川先生の感化である」といふことをたびたびいはれたが、それにもかゝらず先生最初の勞作がかへつて支那の古銅器であるとはすこぶる不思議である。三十七年にはヒルトの海馬葡萄鏡を批判し、自らも葡萄鏡考を書かれた。しかし、これからはむしろ、後に「禽獸葡萄文に就いて」^{大正九年}となり、「細金細工に就いて」^{大正十一年}に發展する東西文化の交渉といふ點に注意が向つたと見える。大學の卒業論文は希臘佛教文化の東漸であり、三十九年、國華誌上に連載された「希臘印度式佛教美術に就て」はすなはちそれである。しかし、まだこのときはフーシンの大著 *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra* も出てゐない。その後になつてこれを手に入れたことを話されたが、それがいま赤い背皮で製本されて先生の書棚に並んでゐる。先生のこの方面に關する追究は先

生を一個の考古學者たらしめず、また美術史家たらしめ、日本、支那朝鮮にわたる數々の佛教美術の論文が現れ、「西魏の四面像に就いて」となり、「百濟觀音」となり、「法隆寺の建築様式と支那六朝の建築様式に就いて」等の文章になつた。そして最近には朝鮮の總督府から出版した『佛國寺と石窟庵』の一部として現れた。古銅器研究も大正年間、『泉屋清賞』の編纂に參與されるやうになつて、その概説となり、圖版解説となつて現れた。その例言、劈頭の第一に「從來古銅器の名稱を附するに、器の銘識あるものは之を冠し、………今悉く紋樣製作の特徴を以て器に命ず」といふ。これは從來の器銘偏重をおさへ、考古學のいはゆる形式論を正面にもち出したものである。こゝに古銅器の形式的研究の道が開け、その結果はつひに昭和九年の『刪定泉屋清賞』に見る概説にまで發展した。しかし先生の形式論は單に形式觀に終らない、そこに必ず史的考察のふくまれてゐることが特色であつて、かういふ點に先生の特殊な風格があつた。先生は必ずしも方法論の理窟をこねまはされなかつた。しかし、一に實をもつて、身をもつて示されたのである。そのほか支那古

銅器に關する見解は時折發表されたものがあり、最後が恩賜博物館講演集のそれである。その間、おのづから進歩發達の見るべきものがあり、それは先生のあゆみであるとともに、また同時に日本學界のあゆみでもあつたのである。生前企圖された先生の論文集にもその最初の國華の一篇と最後の博物館の一篇とを併せ録しようとの意圖があつたのはまた宜なるかなで、正にこれによつて日本學界のあゆみを窺ふことができようといふものである。

先生の繪畫に關するものは明治四十年前後の畫梅と梁楷で終つてゐるが、これに代つたのは滿洲考古學の研究である。明治四十四年の「旅順刁家屯の一古墳」、四十五年、大正二年の「南滿洲に於ける考古學的研究」はその第一石であつて、鳥居龍藏博士の『南滿洲調査報告』明治四十四年に少し遅れてゐるが、その後鳥居博士が全く個人的研究に終始されたのに比して、先生が東亞考古學會を創立して集團的に調査されたことは、鳥居博士の掘らず廣くの主義に對して先生の發掘一所の主義があるのと全く同様に好個の對照である。とにかく先生の滿洲考古學は『貔子窩』にはじまる一聯のモニ

ユメンタルな報告書となつた。先生の親しく指揮されたものとしては昭和十年度の發掘書『赤峰紅山後』——將に世の中に出るばかりになつてゐる——が最後のものとなつたが、今後に遂行されるであらう東亞考古學會の事業は實に先生滿洲考古學の延長にほかならぬ次第である。

先生研究のもう一つの分野は、朝鮮考古學といへう。先生が總督府の古蹟調査事業に關係されたのは比較的遅く、大正七年以來であつて、最初は星州・尙靈・昌寧の新羅古墳を調査され、ついで金海貝塚を發掘されたが、中にも『慶州金冠塚と其の遺寶』はその内容の珍らしく、また金色燦然たる上に、その研究は斬新、論證も該博であるので世目をひいたとともに、先生の朝鮮研究中の壓卷となつたのではないかと思ふ。考古學雜誌に書かれた「朝鮮の古墳」は簡単に朝鮮の古墳を綜括して、系統づけられたものであり、セイス先生のためにデイクートした『新羅古瓦の研究』は教室の報告をこの朝鮮にまでのばされたところに特殊の意味がある。なほ先生は總督府の事業に参加されともにも朝鮮古蹟研究會の事業に盡瘁され、黑板博士の病

後は特にその推進力のごとき観があつたと思ふ。そしてその報告書『彩篋塚』『王光墓』や年度報告の印刷などにも随分力をもちゐられたものである。

支那方面でいへば古銅器研究のほかに、明治四十四年の「支那古代の泥像」から、大正十四年四六倍單行本の『支那古明器泥象圖説』にまで發展せしめられた一聯の支那古明器土偶の研究がある。また『有竹齋古玉譜』にまとめられた「支那古玉概説」があり、雜誌「民族」に連載された支那の土器概説、「壺」——東亞考古學研究には、この名稱の下に收めてある——がある。「土器は考古學の尺度である」との言を體得された先生は古くから支那の土器について注意されてゐた。東洋學報^{明治四十五年}に發表された「遼東發見の古代土器」國華^{大正六年}に發表された「漢以前の土器に就て」はその尺度確立に努められたものといふべく、その長い注意の結果がつひに壺の連作となつたものと思ふ。その頃親しく先生について魏子窩の土器を整理したわたくしは一片の破片だに粗末にされぬ態度に深く感佩し、考古學者正にかくのごとくなるべしと思つたのである。發掘した土器破片は凡てもつて歸れとは「通論考古學」

に出て來るが、もつて歸つた土器破片は目ぼしいものをビックアップしないで、あまり重要でないものからふり落して行けば見落しが無い、そしてこれを何回か繰返すべく、決して一時に大淘汰をやるべきでないといふ。そしてこの態度を口でいふより、むしろ身をもつて示されたところにわたくしは萬斛の感懐をいだくのである。

とにかく、支那のことに關するかぎりは遺物の體系化に終始されたが、先生のやり方からいへばこれで満足するものでないことは明らかである。土器破片の尊重といひ、朝鮮・滿洲のやり口からいへば當然遺跡發掘にまで向ふべきはずである。事實、殷墟の發掘なども考へられ、匪賊の風聲を氣にしながらその土地を踏まれたこともあるのだが、長く日支關係が正調を缺き、つひに、そのことを見なかつたのはすこぶる遺憾である。しかるに支那事變を契機として當然日支提携は生れるべく、その遺蹟發掘の機會も到來したこの際に、はからずも不歸の客となられたことはかへすがへすも残念なことである。

支那佛教美術は先述のごとく主として日本・朝鮮と

の文化交渉の側から見られたものが多い。「法隆寺の建築様式と支那六朝様式に就いて」にはじまる一聯の建築論文は殊にさうであり、西魏の四面佛も結論としては橘夫人厨子の天蓋との關係に觸れてゐる。義縣萬

佛洞、雲岡石窟寺は紀行風な報文にとゞまつてをり、龍門石窟は全く何もない。しかし大正年間には引續き支那石窟の特殊講義を行つてゐられた位で、その方面にももとより研鑽が深かつた。わたくしが支那石窟研究を志し、數ヶ月振りに雲岡石窟の調査から歸つたのに、つひにそれを聽いてもらふこともできなくなつたのは、この上もなく淋しい思ひがする。

そのほか東洋學報の貝貨考も得意で、最近には蟻鼻錢に就いて書かれたものがある。またロンドン滯在中

書かれた「スタイン氏發見品過眼録」東洋學報も近頃敦煌戸籍の研究が盛んになつて、そのうちの戸籍斷簡がしばしば引合に出されるのもまた先生の話題になつたものである。

まづ、右のやうに先生の研究は多方面にわたつてゐる。けれどももうひとつこれを綜合することはなほさう先生の得意とするところであつて、その收獲が『東亞文明の黎明』であり、また考古學の指針『通論考古學』でもあるといへよう。實に綜合の作は先生獨歩のところである。したがつてその先生が病氣靜養中書かれ、つひに絶筆になつたものが小學讀本におさめられるべき考古學の一節であつたことは、わたくしたちにとりて決して偶然とは思はれないのである。

附 著 作 目 録

——*は單行本、日本關係をのぞく、東亞考古學關係に限る——

明治三十六年

支那の古銅器に就いて(國華一六三)

海獸葡萄鏡に就いて(考古界三ノ九・一

六)

畫梅に就て(國華一九五)

明治三十七年

ヒルト氏の支那古銅器殊に海馬葡萄鏡に

明治三十九年

希臘印度式佛教美術に就て(國華一八八・

明治四十二年

梁楷の傑作出山釋迦及び山水圖(國華二

關する研究(國華一七四)

一八九・一九一・一九二・一九三・一九

二七)

明治四十三年

南滿洲の古蹟(百濟觀音所收)

西魏の四面佛に就いて(史學研究會講演集四)

明治四十四年

支那の土偶と日本の埴輪(藝文二ノ一)

旅順刀家屯の一古墳(東洋學報一ノ二)

支那古代の泥象(國華二五・二五四・二五六・二五八)

十二神象彫刻の石棺(東洋學報一ノ三)

明治四十五年

遼東發見の古代土器(東洋學報二ノ二)

支那古代の貝貨に就いて(東洋學報二ノ二)

貝貨考補遺(東洋學報二ノ四)

南滿洲に於ける考古學的研究(第一回)

(東洋學報二ノ三)

大正二年

南滿洲に於ける考古學的研究(第二回)

(東洋學報三ノ一)

牧城驛古墳より發見せる漢代の漆器及其他の遺物(國華二七三)

大正三年

支那文化とスメル文化—ボール氏の言語

文字比較研究—(東洋學報四ノ二)

大正六年

漢以前の土器に就て(國華三二一)

支那古銅器と土器との關係に就いて(東洋學報七ノ二)

大正七年

スタイン氏發見品過眼錄(東洋學報八ノ一・四)

シャヴァンヌ博士の事ども(藝文九ノ五)

支那古銅器序説及圖版解説(泉屋清賞)

大正九年

禽獸葡萄紋に就いて(國華三五六)

漢代彩甁硬化成績報告(法隆寺壁畫保存法調査報告)

北宋墓甁壁畫硬化成績報告(法隆寺壁畫保存法調査報告)

大正十年

慶州金冠塚の發掘(大阪朝日新聞、百濟觀音所收)

朝鮮の古蹟(大阪朝日新聞、百濟觀音所收)

朝鮮の古蹟調査(民族と歴史六ノ一)

南滿洲の重要な古蹟(民族と歴史六ノ一)

六朝の土偶(考古學雜誌一一ノ九)

支那古銅器研究の新資料—殷墟發見と傳

ふる象牙彫刻と土器破片—(國華三七九)

旅順刀家屯古墳調査補遺(東洋學報一一ノ三)

金蠶考(史林六ノ四)

大正十一年

唐代の泥象に就いて(歴史と地理九ノ五)

細金細工に就いて(史林七ノ四)

東亞文明の始源(大阪朝日新聞、百濟觀音所收)

鐘概説及圖版解説(陳氏舊藏十鐘)

*慶尙北道星州慶尙南道昌寧古墳調査報告

(梅原末治氏共著)(朝鮮總督府大正七年度古蹟調査報告第一冊)

*通論考古學(四六版)

大正十二年

*金海貝塚發掘調査報告(梅原末治氏共著)(朝鮮總督府大正九年度古蹟調査報告第一冊)

大正十三年

橋(大阪朝日新聞)

唐代女像の一形式(佛教美術一、百濟觀音所收)

支那六朝の佛像と土偶(國華四〇六)

朝鮮慶州の大發見(週刊朝日、百濟觀音所收)

*慶州金冠塚と其の遺寶本文及圖版上(梅原末治氏共著)(朝鮮總督府大正九年度古蹟調査特別報告第三冊)

古銀銅面考(史林一〇ノ一)

朝鮮の古墳(考古學雜誌二四ノ一五、恩賜京都博物館講演集一)

大正十四年

印度に於ける最近の考古學上の大發見

(歴史と地理一五ノ二)

塔(大阪朝日新聞)

漢畫像石類似的の形像ある明器(考古學雜誌一五ノ五)

慶州の瑞鳳塚(大阪朝日新聞、考古游記所收)

玉蟲翅飾考—慶州金冠塚の遺物と玉蟲厨子—(白鳥博士還曆記念東洋史論叢)

天平彫刻と新羅彫刻(佛教美術五)

支那古玉概説(有竹齋古玉譜)

*支那古明器泥象圖説(四六倍版)

大正十五年

法隆寺の建築様式と支那六朝の建築様式

に就いて(内藤博士還曆祝賀支那學論研究所收)

叢)

瑞鳳餘影(佛教美術八、考古游記所收)

雲崗から明陞へ(佛教美術六・七・九、考古游記所收)

古游記所收)

支那古銅器圖版解説(泉屋清賞續編上冊)

*橋と塔(三五版)

*百濟觀音(四六版)

Engraved Ivory and Pottery found

in the Site of the Yin Capital

(Memoirs of the Research Department of the Tokyo Bunko, no. 1)

甘肅の彩繪土器(民族一ノ二、東亞考古學研究所收)

支那の原始土器(民族一ノ三、東亞考古學研究所收)

殷墟の白色土器(民族一ノ四、東亞考古學研究所收)

漢式の黝色土器(民族一ノ六、東亞考古學研究所收)

學研究所收)

ガンダーラ彫刻解説(源豐宗氏共著)(東西古銅金石集解説)

昭和二

年

韃靼羅彫刻と六朝の泥象(史林一二ノ一)

朝鮮の新羅燒(民族二ノ三、東亞考古學研究所收)

東方考古學協會と東亞考古學會のこと

(民族二ノ四)

魏子窩の土器(民族二ノ五、東亞考古學研究所收)

昭和三

年

*慶州金冠塚と其の遺寶圖版(梅原末治氏共著)(朝鮮總督府大正九年度古蹟調査報告第三冊)

鼎と鬲に就いて(狩野教授還曆記念支那學論叢)

支那の古玉器と日本の勾玉(東亞考古學論叢一)

*京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄(菊版)

考古學上より見たる東亞文明の黎明

(歴史と地理二二ノ一・二・三)

*魏子窩—南滿洲碧流河畔の先史時代遺蹟(東方考古學叢刊二)

旅順石塚發見土器の種類に就いて—白色土器と陶質土器の存在—(人類學雜誌四四ノ六)

アフガニスタンの佛頭(佛教美術一四)

殷墟發見の大石磬(宅博士古稀祝賀記念論文集)

*考古游記(四六版)

昭和三

年

東方考古學協會と東亞考古學會のこと

(民族二ノ四)

魏子窩の土器(民族二ノ五、東亞考古學研究所收)

昭和三

年

*慶州金冠塚と其の遺寶圖版(梅原末治氏共著)(朝鮮總督府大正九年度古蹟調査報告第三冊)

鼎と鬲に就いて(狩野教授還曆記念支那學論叢)

支那の古玉器と日本の勾玉(東亞考古學論叢一)

*京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄(菊版)

考古學上より見たる東亞文明の黎明

(歴史と地理二二ノ一・二・三)

*魏子窩—南滿洲碧流河畔の先史時代遺蹟(東方考古學叢刊二)

旅順石塚發見土器の種類に就いて—白色土器と陶質土器の存在—(人類學雜誌四四ノ六)

アフガニスタンの佛頭(佛教美術一四)

殷墟發見の大石磬(宅博士古稀祝賀記念論文集)

*考古游記(四六版)

昭和五年

漢千秋萬歲鏡(桑原博士還曆記念東洋史論叢)

六朝の石枕(考古學雜誌二一ノ二)

慶州發見の三面小石佛龕(佛教美術一六)

威壁考附瑤璣(小川博士還曆記念史學地理學論叢)

新發見の漢代の壁畫古墳(大阪朝日新聞)

*東亞文明の黎明(菊版)

*東亞考古學研究(菊版)

昭和七年

漢代の壁畫古墳(東洋美術一四)

新羅の寶冠(寶雲二)

法隆寺金堂壁畫之源流(夢殿六)

慶州の金冠塚(四六版一〇六頁)

昭和八年

漢代の繪畫に就いて(國華五〇八・五〇九、營城子所收)

新羅の畫像甕(美術研究一七)

法隆寺金堂と六朝石窟寺(寶雲六)

爵と杯とに就いて(市村博士古稀記念東

洋史論叢收)

*南山裡—南滿洲老鐵山麓の漢代塋墓—

(島田貞彦氏共著)(東方考古學叢刊三)

支那六朝の石窟寺と法隆寺の塔(夢殿一〇)

遼西義縣の石窟寺(寶雲八)

昭和九年

新羅古瓦の研究(梅原末治氏共著)(京都帝國大學文學部考古學研究報告一三)

支那古銅器概説(刪訂泉屋清賞)

樂浪古墳最近の發掘(科學知識一四ノ九)

支那古銅器の話(瓶史三・四)

支那古銅器に就いて(恩賜京都博物館講

演集一〇)

私の發掘した墳墓(歴史公論三ノ二)

On the Recent Excavation of the Han

Tombs at the Ancient Lolang District, Korea (Proceedings of the

Imperial Academy, vol. x, no. 4)

昭和十年

樂浪の彩繪漆篋(思想一五五)

熱河赤峰遊記(考古學六ノ八)

朝鮮に於ける考古學的調査研究と日本考古學(日本民族)

關野先生と滿洲—特に高句麗壁畫古墳—

(夢殿一四)

*京都帝國大學

文學部陳列館考古圖錄續編(菊版)

昭和十一年

赤峰附近發見の完形彩文土器(考古學雜誌二七ノ二)

朝鮮の考古學調査に關する私の最初の思

出(考古學七ノ六)

On the Painting of the Han Period

(The Memoirs of the Research

Department of the Tōyō Bunko,

no. 8)

蟻鼻錢に就いて(商業と經濟一八ノ一、

武藤教授在職三十年記念論文集)

昭和十三年

佛國寺と石窟庵總説(總督府古蹟寶物概

記一)

〔水野清一〕